シェーキー秋友の

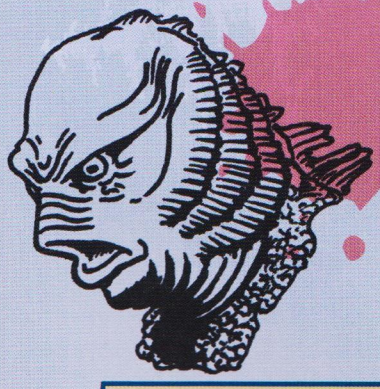
銀幕怪物天国

第四幕　滅びゆく種

ことの発端は１９３９年か４０年ごろのアメリカ、映画『市民ケーン』の制作中に遡る。同作品に出演していた俳優ウィリアム・オーランドが、監督オーソン・ウェルズの家を訪れた。オーランドはそこで、ブラジルの高名な映画作家ガブリエル・フィゲロアから不思議な話を聞かされる。ブラジル奥地のある村には毎年一回、半人半魚の生物が現れて乙女の生贄を要求する、というのだ。フィゲロアは、それが伝説や噂ではなく、確固たる現実だと主張した。

およそ１０年後、オーランドは俳優業を退き、ユニヴァーサル社の専属プロデューサーとして、西部劇やＳＦ怪奇映画を製作するようになった。ときは戦後の５０年代。第二次大戦によってもたらされた科学技術の急速な発達が、人類の夢を拡大すると同時に、核兵器に代表される具体的な恐怖を広めた時代である。３０年代に生まれた吸血鬼、ミイラ男などの伝統的な怪物映画は、４０年代を境に下降線をたどり、新しい怪物の誕生が待望されていた。オーランドは、かつてウェルズ邸で聞かされた怪生物の話に思い当たった。そうして生まれたのが１９５４年ユニヴァーサル社の映画『大アマゾンの半魚人』である。

物語の骨子は単純だ。アマゾン河流域で発掘調査をしていた地質学者が、水棲生物と人類の特徴を兼ね備えた化石を発見、知人の魚類学者らとともにさらなる手がかりを求めて「黒い沼」と呼ばれる秘境に向かう。だが、その地にはひとりの半魚人がいまも生存していた。調査隊員を次々と襲い、惨殺していく半魚人。だが彼は、隊の中の女性にだけは特別の執着を示し、そのためついに銃弾に倒れる。



もはや言うまでもないが、この半魚人（米国ではギルマン＝エラ人間と通称される）こそ、『ヴァンパイア』シリーズで活躍する水中の帝王、オルバスの原型なのだ。

映画『大アマゾンの半魚人』の特徴は、オカルトや超科学を思わせる要素を退け、常識で納得できる描写を心がけた点にある。半魚人は怪力を持ち、水中では敏捷で神出鬼没だが、特に巨大というわけではないし、その他の超常的な能力も一切ない。能力を限定されたことによって、この半魚人は強烈な実在感を放つようになった。

実はこうしたリアリティは、１３世紀ごろからヨーロッパに流布した、人魚にまつわる噂の特色でもあった。当時の博物学者や探検家達は、半人半魚の生物を、空想や象徴学とは無縁の、現実の生物として信じ、語ったのである。だが、やがて大航海時代が訪れ、人魚が実在しないことが明らかになると、彼ら、あるいは彼女らは、再び伝説の領域へと帰っていくことになった。ちなみにオルバスの種族名として、カプコンの公式資料などに記載されている「マーマン」とは、オランダ語で男性の人魚を表す言葉である。対して、人魚を指す最も代表的な単語「マーメイド」は、厳密には女性の人魚のことだ。

さて、幻想的な部分を排することで実在感を高めた『大アマゾンの半魚人』だが、実は半魚人の行動には、幻想的な伝説と共通する要素が、強く残っていた。若く美しい女性への執着である。人魚と人間の恋愛は、人魚伝説の普遍的なテーマのひとつだ。男女の立場は逆になるが、人魚の娘が人間の男に恋をして、その恋のために破滅するアンデルセン物語のエピソードを思い出してみるといい。

一応、劇中のどこを見ても、半魚人が抱く女性への執着が恋愛感情によるものだという証拠はない。理屈で考えれば、半魚人の男が人間の女に恋をするのは、人間の男が半魚人の女に恋をするのと同じぐらい突飛な出来事だ。しかし、観客達はなんの疑問も抱かずに、それを恋愛感情だと見なしただろうし、制作者も恐らくは、そうなることを期待しただろう。

そうなれば観客は、半魚人が人間と同じ美的観念を持っていると思って、無意識のうちに彼に共感したはずだからだ。その共感は、映画のもうひとつのテーマを活かすために、不可欠のものであった。

その、もうひとつのテーマとは、滅びゆく種の哀愁であった。半魚人はもしかすると、太古から連綿と生き続けてきた両棲生物の、最後の生き残りかもしれない。彼が人間を襲うのは、生活圏を荒らされたための防衛行動である。しかし、人間達も身を守るために彼を倒さなければならない。その哀しさを観客に伝えるには、半魚人は無意識的にせよ、観客の共感を呼ぶ要素を備えていなければならなかったのだ。銃弾の雨を浴びた半魚人が、うめきながら水に逃れ、ゆっくりと沈んでいく終幕で、その感傷は頂点に達する。

我らがオルバスは、人間への恋情には無縁だし、『大アマゾンの半魚人』では考えられなかったような異常な超能力をいくつも持っている。しかし、こうした追いつめられた種族の哀切は、両者に共通する重要な要素だろう。そしてオルバスにはもうひとつ、完成した映画というよりは、ウィリアム・オーランドの初期構想に近い特徴がある。

オーランドは最初、エラやヒレなどの器官をすべて持ちながら、しかし全体の印象としては人間にごく近く、高い知性を感じさせる、美しい水棲人類を作りたいと思っていた。彼の案に従って模型が作られたが、ユニヴァーサル社の経営陣は難色を示した。怪物の容貌にしては、凶悪さが足りないというのである。会社の意向に従って、魚じみた顔の半魚人が生まれ、知性や感情の描写も暗示にとどめられた。

あまりにも人間的で、美しく、悲しく、それでも人間ではない存在。オーランドが思い描いて実現できなかった水棲人類は、いまわれわれの目の前にあるオルバスの姿そのものだ。４０年前、ひとりの映画人の果たせなかった夢が、期せずして現代の日本で実を結んだのである。

参考文献：
米国版「STARLOG」２１８号、澁澤龍彦著・河出文庫『幻想博物誌』、朝日ソノラマ社「宇宙船」１５号、中子真治編著・講談社刊『フィルム・ファンタスティック』第２巻

さて、今回は、このコーナーに投書してくれた会員の中から１名に、『大アマゾンの半魚人』のフィギュア完成品（全高３５cm）を贈ることにする。およそ１０年前にわたしが組み立てて塗装したもので、『ヴァンパイア』プロジェクトの発足時にはデザインの資料として使われたが、ほとんど参考にならなかったという由緒正しい品だ。反論や賛同、質問や注文など、忌憚ない声を寄せてくれたまえ。（宛先はP.30）